

言語と哲学 : 日本語の哲学的効用

著者	雨宮 民雄
雑誌名	東京海洋大学研究報告
巻	3
ページ	5-12
発行年	2007-03-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1342/00000186/

言語と哲学—日本語の哲学的効用—

雨宮民雄*

(Accepted September 28, 2006)

Language and Philosophy

Tamio AMEMIYA*

Abstract: Man cannot think without language. Therefore man's thinking is necessarily restricted by the structure of language. The languages of philosophy are European languages whose cores are subjects. Subjects correspond to self-identical individuals. So philosophical thinking is confined to the realm of self-identical individuals.

Everything in philosophy is individual. Even the raw material of our world is explained as the individual perceptions or something like these. But actuality is not made up of individuals. It is shapeless. Continuous becoming is the actual state of the world we live in. Some philosophers realized this fact. However, they could not overcome the limit of individuals because they cannot think without subjects.

On the contrary, the Japanese language is free from subjects. Indeed school-grammar tells us that the Japanese language has subjects like European languages, but it is a fiction made by the Meiji government. The Japanese language has in itself no subject. This means that Japanese thinking can overcome the limit of European thought.

Key words: subjects, self-identical individuals, shapeless actuality, the Japanese language, predicate

第一章 言語研究の現在

言語をめぐる哲学, 言語学, 脳科学は, 今日, 狭隘な言語観のもとに拘束されている。曰く, 言語は人間の行うゲームである。曰く, 言語は人間がそれを使って連続体を秩序づける記号体系である。曰く, 言語は人間の脳に先天的に組み込まれた人間固有の能力である。すなわち, みな一様に曰く, 言語は人間の所有物であり, 人間の能動性の発現である。

だが, すべての言語が人間を始点として外界へと向かう能動性のベクトルを形成しているのであろうか。言語はもっと多様な仕方現実とかがわっているのではないのか。

近代西洋の思考方法からすれば, 人間中心の言語観は自然なものであろう。世界の中心には人間がいる。その人間は思考することにおいて世界の中心である(我思う故に我あり)。神も自然も人間の思考から導かれる。世界の総体を人間の思考が支えている。その思考は言語を離れては成立しない。よって, 言語は人間のものであり, 人間の能動性の発現である。近代西洋の思考方法を前提すればこの言語観は正しい。

しかし, 世界には6000もの言語がある。そのすべてが, 西洋の作り上げた世界観, 人間観, 言語観の枠内に納まるとは到底考えられない。ウォーフによるホピ語の研究

は, 西洋世界のフロンティアの中にさえ, 西洋語とはまったく異なる現実把握の様式があることを示している。世界全体を探せば, 膨大な数の(われわれの常識から見て)特異な言語が見つかるに違いない。

たしかに, われわれの生きているこの時代において最も重要な言語は西洋語である。それは厳然たる事実である。だが, このまま西洋の敷いた路線の上で人間が存続できるとは思えない。政治的, 社会的, 自然的環境の変動は予測しがたい。予測しがたい変動にそなえて, 人間の生き方と言語の多様性は可能な限り守られるべきではないか。

数巻からなる英文の言語学辞典を覗いて驚いた。日本語の項目には, 「象は鼻が長い」という文における「象」は大主語であり, 「鼻」は小主語であると説明してあった。いかにも時代遅れの記述である。しかも, この項目を書いたのはれっきとした日本の大学の先生であった。こんな具合であるから, もっと周辺的な言語について書かれた項目のレベルがどのようなものであるか, 推して知るべしである。

学問は世界の多様な言語に対して決して公平ではない。真摯な研究は一部の有力な言語についてのみ行われる。中心と周辺という政治的構図がそのまま言語の研究に反映している。

チョムスキー主義者とと言われる人々はすべての言語を貫く普遍文法があると言う。当然, 彼らは, その普遍文法に辿り着くまでに, 世界の多様な言語についてそれなりの解

* Department of Marine Policy and Culture, Faculty of Marine Science, Tokyo University of Marine Science and Technology, 5-7 Konan 4-chome, Minato-ku, Tokyo 108-8477, Japan. (東京海洋大学海洋科学部海洋政策文化学科)

明を済ませているにちがいない、そう期待するのは自然であろう。ところが、不思議なことに、チョムスキー主義者の研究対象はもっぱら英語である。英語に基づいて普遍文法のモデルを拵え、それを他の言語に適用するというのが生成変形文法の基本姿勢である。言語の多様性は普遍文法の特長から逆に説明されるべきものとみなされる。

日本において現在日本語を研究している人たちの大部分は生成変形文法学派に属する。彼らの仕事は、英語から得られた(普遍的)モデルが日本語に適用可能なことを確認することである。たしかに適用は可能であろう。日本人だって洋服は着られる。問題は和服の方はどうなるのかということである。

言語に関する最新の理論は脳科学を駆使するものである。『言語の脳科学』という本が毎日出版文化賞を受賞した。この本の著者も典型的なチョムスキー主義者である。同書による言語の定義は次のごとくである。「言語とは、心の一部として人間に備わった生得的な能力であって、文法規則の一定の順序に従って言語要素(音声・手話・文字など)を並べることで意味を表現し伝達できるシステムである。」(p.22.) ここで、心およびその一部としての言語は脳の高次機能のことである。脳の高次機能は「意味を表現し伝達できる」能力であり、かつ、その能力は一つのシステムであるとされる。

言語が人間だけのものか否かの問題は脇に置くとしても、脳の機能と人間の生得的な能力と言語システムとを同一視してかかるというのはあまりに乱暴すぎないか。定義というより布告である。そこには、論理学で言う先決問題要求(Begging the Question)の臭いがする。

もちろん、言語研究において脳科学は重要である。とくに、脳の障害と言語障害との関係は十分究明しておくべきである。しかし、言語と言語活動に対応する脳の状態とは別物であることを忘れてはならない。人間が歩いているときの脚の関節の状態を人間が歩くことと混同してはならないのと同様である。そのうえ、言語に関係する身体部位は脳ばかりではない。試しに、目と口と喉の随意筋を弛緩させてみるとよい。心の中の言語がきれいに消えてしまうことを体験できるであろう(ジェイコブソンの斬新的弛緩法)。

脳という特定部位だけを調べても言語の生理はわからない。同じ理屈で、西洋語という特定部位だけを研究しても言語の本性はわからない。現実には複雑である。複雑な現実には多様な仕方にかかわる全言語に対する同等の目配りは言語研究の満たさなければならぬ最低条件ではなからうか。超越的な神の言語が問題になっているわけではないのだから。だが、研究者達は何のためらいもなく言う。言語は、ゲームや記号体系や脳内システムとして人間の手元にある、と。そうして、そういう学問的権威によって人間と現実の関係は固定され、人間の生き方が誘導される。

どうしてそのようなことになったのか。その理由は世界

の権力構造にある。これについてはあらためて説明するまでもないであろう。今、哲学者、言語学者、脳科学者は、みな、言語とは世界の覇者の言語、すなわち、西洋語のことであると信じて疑わない。西洋語以外の言語は、西洋語の亜種にすぎないと、みな、信じている。「言語=西洋語」という等号は言語研究者にとっては客観的事実である。「バルバロイはヘレネスの前に跪け。」

20世紀初頭からは、哲学の世界でも言語哲学が有力となった。その言語哲学もまた西洋語の枠の中で研究を行う。そのため、言語哲学は、現実に対する恐を知らず、人生の不条理に泣くこともない。言語哲学は、誇り高き人間の哲学である。研究の方向も、自然の成り行きで、現実を超越する記号体系としての言語の構造の精緻な分析に走る。研究が精緻すぎて部外者は口を出せない。

言語哲学はもともと伝統的哲学との対決から発生した。ある意味で自己否定の思想である。その端緒となった論理実証主義の活力は、伝統的哲学の言説をすべて無意味と宣言するところから生まれた。科学的思考という対立項によって哲学が活性化したのである。私の学生時代にはその活力の名残があったし、哲学を科学的なものにすること(つまり不可能なこと)をめざすテキストがまだゼミで使われていた。

けれど、その後、科学そのものが颯爽とした姿勢を失い、人間臭い営みに墮落してしまった。その結果、いまでは科学も社会学(科学社会学)の対象になっている。科学的思考にはもはや哲学を刺激する対立項の役割は果たせない。

さらに、アメリカから発したグローバリゼーションの波は、言語から西洋語という幅さえも削ぎ落としつつある。いまや米語だけが言語の名に値するかのごとくである。英米語対仏語という互いに他を牽制するエネルギーも失われた。そうになると、言語を巡る議論はますます神学的になる。数千の名もなき言語は沈黙し、天から「言語とはかくなるものなり」という声が降りてくる。

第二章 主語定位

30年ほど前に、日本を訪れた世界哲学会議の議長が、哲学をやるなら西洋語の二つぐらいは自由に使えるようになりなさいと私に言った。そのときに、あなたこそアジアやアフリカの言語を二つ三つ勉強なさらなくてよいのですかと問いかえすことが出来たら武勇伝になるが、あのように背の高い人を見上げながらそんな無礼なことを言う勇氣はその頃の私にはなかった。

哲学が西洋哲学のことであるならば世界哲学会議の議長の忠告は正しい。しかし、哲学が西洋という狭い枠組みの中に安住してられる時代は去った。差し迫った問題とされる科学技術倫理にしても、哲学が西洋近代の枠組みを越えないかぎり、単なる利害関係の調節の学になってしまう。もともと哲学はその領域においても研究方法において

も一切の制約を持たない学である。哲学が西洋という一つの枠組みを越えることなどたやすいことではなからうか。

西洋の哲学史を紐解くならば、近代のあたらしい哲学の潮流は、当時の国際語であったラテン語や仏語に比べて後進的とされていた自国語を使うことによって生まれたことが分かる。イギリス経験論と英語、ドイツ観念論と独語がそのよい例である。これを世界規模に広げて考えてみてはどうか。

世界には6000もの言語がある。それぞれの言語のネイティブ・スピーカーが自国語で哲学をする。もちろん、無から哲学を興すことはできないから、ギリシャ以来の西洋哲学の伝統を自国語で受け継ぎ、そしてそれを拡張する。そのとき、哲学は西洋の哲学から人間の哲学に脱皮するであろう。

しかし、明らかにこれは空想的なお話である。残念ながら世界の知識と富と暇(σχολή > school)は世界に均等に分配されているわけではない。もっと現実味のあることを考えなければならない。

世界の言語の総体を調査するプロジェクトの立ち上げはどうか。これには、カネがかかる。6000の言語のそれぞれに10人の研究者を20年間派遣するのに、一人年間1000万円として総計12兆円かかる。各年度6000億円。私は安いと思うが、新しい言語、新しい思考様式を知る喜びよりも、自分達の言語、自分達の思考様式が相対化されることの方が恐ろしくてカネを出す先進国は出てこないであろう。

私個人が異種の言語を探し出して現在よく知られている言語と対比し、総合するという道もある。だが、私にはそれだけの能力がない。歳も食ってしまった。そういうことをしてくれそうな若者もない。そういうわけで、私の議論のスケールはここに至って急速に収縮し、等身大のところに着く。私が以下で目標とすることは、われわれの日常使っている言語が、西洋語を補う役割を果たせるというささやかな指摘である。世界の言語としての西洋語でも語れない部分を日本語は語ることができる。このことが示せば、世界の言語による世界の哲学という大きな望みには届かなくとも、言語の多様性の取り戻しへのアピールにはなるであろう。

現代日本語は隠れたクレオール語である。現代日本語の、半分は西洋語、もう半分は伝統的日本語である。ガソリンと電気のハイブリッド車のようなものである。今日、日本語を使う者は、それと気づかないうちに、これら二つの言語を合わせ使っている。

そのさい、西洋語はすでに述べてきたように、現実へと立ち向かう人間の能動性の言語である。その根幹をなすものは秩序を構築する形相である。これに対して、伝統的日本語は、これから述べるように、現実から立ち現れる言語である。そこには形相によって秩序づけられる以前の質料がなまのままで姿を現す。人間はそこにおいては現実に包

囲された受動的生物である。

かりに両者が、一方は外国語、他方は母国語としてあい対立しているとするならば、世界語としての西洋語に伝統的日本語は服従するしかない。ところが、日本語の中にはすでに西洋語が内在している。西洋語は服従するものとしてではなく、同化して利用するものとして日本語の中にある。そのことに気づくならば、形相と質料、能動性と受動性を言語の不可分な二側面として把握する道がおのずと開かれるのではないか。

日本語を半ば西洋語にしているものは、いわゆる学校文法である。学校文法は日本を近代化する国家プロジェクトの一翼として、英文法を中心とする西洋語の文法を日本語に移し入れたものである。学校文法は、明治の大槻文彦によって基礎を作られ、昭和の橋本進吉によって今日のかたちになった。その要は「主語—述語」形式である。(大槻の場合は、「主語—説明語」と言った。)

10年ほど前に小学校の校長から聞いた話では、現在、主語、述語の概念は小学校3年生から教えているということである。ただし、大学生に主語とは何ぞやと聞くと首をかしげる者が多い。その理由は、日本語に導入された「主語—述語」形式には目にみえる形がないことにある。

主語とは文の中にあつて述語を支配するものことである。いいかえれば、述語は主語に従属する。この主従関係が西洋語では形の上にはっきりと現れる。英語のbe動詞でいえば、文のはじめがIならばam、Youならばare、He/Sheならばisというように述語は主語に従って変化する。ただし、複数形の場合は全部areとなるからこの点英文法は不完全ということになる。仏語なら、je suis, tu es, il/ell est, nous sommes, vous etes, ils/ells sontと全部異なっていて、述語が主語に従属していることが形態的に明確に分かる。主語と述語の主従関係は意味論の次元における関係ではなく、構文論の次元における形態上の関係である。

文法は本質的に構文論である。それゆえ、日本語に西洋語の「主語—述語」関係を導入しようとするならば、形の上でその関係が見て取れるように工夫するのが本来の筋である。たとえば、私は人間である、君は人間であるよ、彼／彼女は人間であるぞ、我々は人間であるね、君達は人間であるよね、彼等／彼女等は人間であるぞね、といった具合である。

しかし、こうすることができなかつたのにはわけがある。述語の力を排斥できなかつたのである。伝統的日本語においては述語はそれだけで文を構成できる文の中心である。西洋語と違って述語はなにものにも従属しない。したがって、形態上、述語が主語にしたがって変化するような文法はそのまま日本語に移し入れることはできない。伝統的日本語を損なわずに主語、述語の概念を日本語の中に組み込むためには意味論の次元でことを運ぶしかない。

主語、述語について、中学の国語の教科書にはこう書いてある(中学校『国語3』光村図書、1998年)。文の四つの

基本型、(1) 何(だれ)が—どうする、(2) 何(だれ)が—どんなだ、(3) 何(だれ)が—何だ、(4) 何(だれ)が—ある(いる・ない)において、「何(だれ)が」を表す文節を主語、「どうする、どんなだ、何だ、ある(いる・ない)」を表す文節を述語という。これは橋本文法そのものである。われわれは例外なく橋本文法によって日本語を学んだ。

文の中心には「何(だれ)」を表す文節があり、それを主語と呼ぶ。そうして、その「何(だれ)」の動作、性質、概念規定、存在の有無を述べる文節を述語と呼ぶ。この説明は、一見、文の組み立てについての説明に見えるが、実は形態上のことには少しも触れていない。あくまでも文の意味内容による説明である。つまり、西洋語の主語、述語という構文論の概念は、意味論の次元において日本語に導入された。

文の四つの基本型は英文法の(構文論上の)基本型から導かれている。「主語+動詞」と「主語+be+補語」の二つの文型がそれぞれ二分されて四つになったのが上記四つの基本型である。すなわち、「主語+動詞」における動詞が一般の動詞である場合が(1)の「何(だれ)が—どうする」、be動詞である場合が(4)の「何(だれ)が—ある(いる・ない)」であり、「主語+be+補語」における補語が形容詞の場合が(2)の「何(だれ)が—どんなだ」、名詞の場合が(3)の「何(だれ)が—何だ」である。

(2)の「何(だれ)が—どんなだ」は、英文法の「主語+be+形容詞」の形式にそのまましたがっているが、それは文の意味内容を説明するときに偶然そうなかっただけである。じっさい、「何(だれ)が—どんなだ」の形式に忠実に「花が赤いだ」とは言わない。「だ」抜きの「花が赤い」が「何(だれ)が—どんなだ」の例文である。この点だけをとりとめても、西洋語の文法の移入にあたって構文論は本来の役割を果たしていないことは明瞭である。構文論を離れた文法というものは存在しないから、正確に言えば、西洋語の文法が日本語に移入されたされたことは一度もないということになる。

それでは、何が日本語に移入されたのか。それは、「主語—述語」形式に表れる言語の様式、すなわち、もの(物、者)に定位して語る言語の様式である。四つの基本文型による主語、述語の説明は、構文論上の説明ではなく、西洋語の様式にそって日本語を使えという指令なのである。すなわち、そこには意味論とともに語用論が働いている。

日本語に対する西洋語文法の導入は、意味論と語用論の次元において行われたわけである。日本語を西洋語として使うこと、これが学校文法の教えるところである。日本語の半分、すなわち、われわれ全員が学校で教育された次元の日本語は、その使い方において、西洋語である。

国家プロジェクトとしての学校文法が成立して110年。日本語の半分が西洋語であることはもはや確定した事実である。言語は時代とともに変化するものであるから、学

校文法の導入による日本語の変化は日本の近代化の一つとしてそのまま受け入れるしかない。また、受け入れても伝統的日本語が損傷を受けるわけではない。というのは、日本語の西洋化は形態上の変化をともしないからである。

L字型をした鉄製のくぎ抜きをパールと言う。私はこれを金槌として使い、金槌と呼んでいる。パールの背の部分は釘を打てるようになってからである。私がパールを金槌として使い、金槌と呼ぶにあたって、私はパールを金槌の形に変形する必要はなかった。「釘を打つ」という意味と「パールを釘を打つものとして使う」という用法だけが問題であったから、パールは、パールとして少しの損傷も受けることなく金槌になった。同様に、日本語は日本語として少しの損傷も受けることなく西洋語になったのである。これが現代日本語である。

第三章 述語定位

日本語が日本語として使われるときの日本語とはどのような言語か。それは主語のない言語である。西洋語の主語に相当する部分は伝統的日本語においては述語を補う補語にすぎない。述語は単独で文を形成する。同一の文の同一の語が、西洋的な意味では主語であり、日本的な意味では補説語である。このことは、西洋語の文法が構文論の次元においてではなく、意味論と語用論の次元で移入されたことによって可能となった。

「夕日が赤い」という文は、学校文法においては、「夕日」の部分は主語、「赤い」の部分は述語である。「赤い」は「夕日」というものの属性として「夕日」に従属する。ただし、単数の「夕日」に代わって複数の「山々」が主語になっても、「赤い」は「赤い」のままである。「夕日が赤い」そうして「山々が赤い」。主語が何であれ、西洋語としての日本語には西洋語におけるような述語の語形変化は現れない。ただ、意味の上で「赤い」は「夕日」に従属するとみなされるのである。

主語としての「夕日」は、現実に輝くあの赤い円ではなく、夕方の太陽のことである。太陽は天体であり、状況によって現れたり消えたりすることのない自己同一者である。「赤い」はその自己同一者としての太陽が特定の条件を満たす夕方に帯びる色である。その赤さも、あの眩しい光景そのものではなく、色相・彩度・明度の体系の中の或る位置を占める色の規定である。自己同一者としての太陽が一定の条件のもとで一定の色規定を持っているという命題が西洋語としての「夕日が赤い」である。

したがって、西洋語として使われているかぎりでの、「夕日が赤い」という文はそれ自体としては、なまの現実から超越した文である。嘘つきのパラドックスに出てくる「この鉤括弧の中の文は偽である」という文と同じ次元にある。後者は自己完結していることによって現実から超越していることは誰の目にも明らかである。これに対して、前者は

「夕日」というものに言及しているから現実と直接関係しているかのように感じられる。だが、主語としての「夕日」はあくまでも自己同一性を持った個体でなければならない。「夕日」がかりにあの眩しい赤い円のことであるとするならば、それは状況の中で瞬間に消えてしまうから、主語とはなりえない。

主語は「甲は甲なり」という同一律を満たさなければならない。そうして、同一律を満たす個体は現実の中にはどこにもない。現実的なものはすべて壊れる。現実的なものは移ろう影である。現代の素粒子論もその宿命を克服することはできない。電子もクォークも理論の中では究極の粒子であるが、現実には十分なエネルギーさえあれば壊れる。現実を超越する形而上学的単子のみが壊れない。主語のホームポジションは現実を超越した世界像の中である。

したがって、「主語—述語」形式の文が現実的意味を持つためには、何らかの媒介者がそれを現実と接合しなければならない。その媒介者が認識主観とか言語主体といわれるものである。認識主観や言語主体は人間である。よって、「主語—述語」形式のもとにある文は、人間が現実を表現する手段、あるいは、人間が混沌とした現実を整頓して世界という秩序体を構成する手段とみなされるわけである。

認識という古典的な枠組みの代わりにゲームという枠組みを採用すれば、文と現実の接合の自由度は飛躍的に高まる。昨今、分析系の哲学では、どんな難問も言語ゲームのやり方の問題に還元して解決するという手法が流行している。たしかに上手いやり方ではあるが、それは言語を人間の中に、現実を人間の外にみる特殊な言語観の内部に発見された万能薬にすぎない。

他方、同じ「夕日が赤い」という文は、伝統的日本語においては、まず「赤い」のである。「赤い」は端的な述べてあり、現実そのままである。主語に連結される規定ではない。「赤い」という述語は単独で現実を述べている。その現実としての「赤い」の相貌が「夕日」である。「夕日」はここでは「赤い」の主語ではなく「赤い」を補う補説語である。相貌としての夕日は主語としての夕日のような自己同一性は持たない。見る間に山陰に隠れて夕焼けに変化する。夕焼けはものではなく、赤く映えている情景の相貌にすぎないように、夕日も状況の変化の中に現れる相貌にすぎない。

西洋語においては、形容詞 red は主語と be 動詞によって連結される。主語と形容詞 red との結びつきは外的、偶然的である。主語が特定の色 red と結びつくのは、無数の可能性の中の一つにすぎない。

これに対して、述語に定位する日本語においては、現実とは端的に「赤い」のである。可能な様々の色規定の中から赤が選び出されたわけではない。いきなり赤いのである。「赤い」は偶然性を持たない端的な文である。端的な文から始まるのが伝統的日本語である。そうして、「赤い」現実から「夕日」という相貌が直接に立ち現れる。すなわち、述

語としての「赤い」も相貌としての「夕日」も可能性の場が開かれる以前のなまの現実である。あの山の端のあの輝きこそ現実である。

かくて「夕日が赤い」という文は、西洋語の「主語+規定の述語」と伝統的日本語の「補説語+端的な述語」の二層の合体であることが分かる。「規定の述語」は「述定語」と呼び「端的な述語」はそのまま「述語」と呼ぶことにする。洋書の邦訳においては、述語が主語を規定することを「述定する」という。この訳語を取り入れて述定語と呼ぶのが自然であろう。そうすると、「夕日が赤い」という単一の文が「主語—述定語」(西洋語)と「補説語—述語」(伝統的日本語)という複層構造を持つことになる。

現在、この複層構造は誰の注意も引いていない。日本語には主語があるとする学説と、日本語には主語はないとする学説が二者択一の関係で対立している。後者は三上章を旗手として一時おおきな勢いを持ったが、すぐに下火になった。今は、再び、前者の方が優勢になっている。それでも、主語があるとは言い張れないケースが多いため、「主語がない」という代わりに「主格でない主語 non-nominative subject がある」という奇妙な言い方が発明された。

学校文法によって現代日本語は教育されているのであるから、日本語には主語があると言わざるを得ない。しかし、伝統的日本語までそっくり主語の圏内に取り込もうとしてもそれは不可能である。私は、伝統的日本語の上に外国語が覆いかぶさっている構造をそのまま現代日本語の実態として受け入れようと思う。

第四章 現代日本語の哲学的効用

現代日本語の複層構造は、われわれの前に単なる歴史的宿命として有るわけではない。そこからは思いがけない哲学的効用が生まれる。それは西洋語で語られる形相と、西洋語では語れない質料の両方を現代日本語では語れるという効用である。

「主語—述定語」形式で語る西洋哲学はロゴス (λόγος) の哲学である。ロゴスはもちろん言語であるが、どうじに、比率、計算、理性という意味を持つ。言葉 (コトの端) と違ってロゴスは設計の言語である。現実から立ち現れる言語ではなく、現実を質料 (ύλη) とみなして世界を設計する人間の能動性の言語である。プラトンのアイデア (形相, アイデア) が西洋思想全体の根幹であると言われるのも当然である。

ロゴスは現実には先立って、比率、計算という合理性に導かれて世界の構想を立てる。ロゴスは、まず、主語=個体 (自己同一者) を立て、個体から事象を構成し、事象から世界を構想する。さらに、世界は可能的諸世界へと拡張される。地上の混沌に天上からアイデア (=構想) が降臨するのである。ただし、そのアイデアは善によって育まれたものでなくてはならない。

このようなロゴスの哲学にとっての難問は質料および質料と形相の境界に位置する感覚である。質料も感覚もロゴスの用意する概念装置では処理不能である。ロゴスはそれらの実質を語るができない。

カントによれば、心が対象によって触発される (affiziert werden) ことによって感性的直感の多様 (感覚) が認識主観に与えられる。カントの認識は空間、時間と 1 2 のカテゴリーによって直感の多様を秩序づけるロゴスである。認識主観は、感官による多様の概観、構想力による総合、統覚による統一の過程を経て対象を構成するが、ロゴスに質料を供給する対象は、それ以前の対象であり、畢竟それは物自体という不可知の闇の中に沈んでいく。カントは人間に知的直感を認めないから、感性的直感の多様がなければロゴスは空虚である。しかも、その感性的直感の多様は心が不可知の物自体に触発されることによってのみ生じる。かくて、質料は物自体という闇となり、感覚はロゴスの光と物自体の闇の中間に位置する説明不可能な所となる。

プラトンの形相一元論に対して、形相と質料の二元を立てたアリストテレスも、より価値の低い形相を質料と呼んだだけで質料そのものについては究明していない。アリストテレスによれば、質料とは、何であるかを言えず、どれほどの量かもしえず、あらゆる規定を受け付けないものであるが (1029a20)、実際には、たとえば、青銅器にたいしては青銅が最も近い質料であり、より根本的には (青銅は溶けるから) 水がその質料であるとされる (1015a79)。そうして、純粋な質料は存在しないと彼は言う。「物的実体は、しかし、すでにこれこれの確定した物体として特徴づけられている。というのは、一般的な物体などというものは存在しないのだから (σώμα γὰρ χοινὸν οὐδέν)。」 (320b23.) ここで χοινὸν σώμα が第一質料 prima materia に相当する。

だが、第一質料が存在しないとすると形相に対して質料を立てた意味が分からなくなる。少なくとも純粋形相の方は神として明確に存在するのであるから、形相と質料の非対称性は明らかである。形相、秩序、理性というロゴスの範囲の内側では雄弁な西洋哲学も、質料、混沌、感覚というロゴスの外側に対しては無力である。

イギリス経験論のように、感覚を生じさせるものを議論の過程で消し去り、感覚を認識の起点に据えれば物自体や第一質料はなしで済ませる。ところが、感覚を認識の起点に据えるということは、感覚を主語の位置に据えるということである。そのとき、感覚は自己同一的な〈もの〉になってしまう。イギリス経験論における観念・印象やその後継者ラッセルのセンスデータ、さらには、実証主義者マッハの感覚要素は、すべて感覚ではなく、感覚と名付けられた特殊な個体にすぎない。

たとえば、ロックは、「知性がひとたびこれらの単純観念を貯えらるると、知性はそれら単純観念を、ほとんど限りなく多様なまでに繰返し・比較し・合一する力能を持ち、し

たがって、新しい複雑観念を好き勝手に作ることができる」 (p.119, 邦訳 159 頁) と言う。無限に反復可能なものこそ、まさに自己同一者であり、個体である。また、パークリーは、林檎という名前で表示される物体は、色彩、味、香り、形状、硬さという複数の〈もの〉が一つになって観察されたものであると言う (p.23, 邦訳 43 頁)。さらに、ヒュームは、知覚を印象と観念、単純と複雑に分けたあとで、「それら対象 objects のもつ性質と関係をより厳密に考察しよう」 (p.2, 邦訳 129 頁) と言う。ロック、パークリー、ヒュームのいずれにおいても観念は何のためらいもなく自己同一的な〈もの〉として扱われているのである。

マッハの場合、感覚はもっと意識的に、世界の単位とみなさる。それらは、はっきりと ABC…KLM…αβγ…といった記号によって表示される。記号の成立する条件はそれに対応する自己同一者があることであるから、マッハの感覚要素はまぎれもない個体である。これら感覚的要素から思惟経済の原理にしたがって、物体や精神、さらに、物理的世界や精神的世界が構成される。

感覚は本来「主語—述定語」における述定語に対応するが、述定語は主語の地平にあるからたやすく主語に変換され、個体に変身する。個体に変身可能な感覚は質料ではなく、質料と形相の境界にある規定にすぎない。これに対して、「補説語—述語」形式における述語は、端的な現実としての色や音や運動を述べている。述語の述べる色や音や運動は何の形も持たない。それらは自己同一的な個体でないばかりか、相貌ですらない。

「赤い」は「赤いもの」ではないし、「赤さ」でもない。「騒がしい」は「騒がしいもの」ではないし「騒がしさ」でもない。「走る」は「走るもの」ではないし「走り」でもない。それらは端的に「赤い」のである。「騒がしい」のである。「走る」のである。それらは無形の現実であり、われわれはその無形の現実には晒されて生きている。

現代日本語は、かくて、単一の文の中で見えざる複層構造を形成している。一方の層はロゴスと同じ「主語—述定語」形式を持ち、他方の層は日本語特有の「補説語—述語」形式を持つ。「主語—述定語」の層は西洋的に形相を語る。もとの西洋語はこの単一層しか持たないから形相しか語れない。だが、現代日本語にはもう一つの「補説語—述語」の層が重ね合わせになっており、その層が質料を顕現させる。質料の顕現する「補説語—述語」は「主語—述定語」と一体になっている。それゆえ、質料から形相への変換は (感覚と違い) 認識主観なしで起きる。

「夕日が赤い」という文は、われわれにとっては、まず、「赤い」という現実である (言=事)。その「赤い」現実には「夕日」という相貌を持つ。「補説語—述語」としての「夕日が赤い」は一定の相貌を持つ現実であり、形相に対しては質料である。補説語としてのその相貌は、同一の文の中で重ね合わせになっている他の層、すなわち、「主語—述定語」形式の中の主語に変換され、自己同一性を獲得する。現

実の相貌から世界像の中の個体へと変身するのである。どうにも、「赤い」という端的な述語は述定語に変換され、個体に変身した「夕日」の規定となる。

こうした変換によって、現実には形相が付与される。ひとたび形相が付与されれば、形相に自足する西洋のロゴスはそれ以前のなまの現実をただの混沌として抑圧する。そのため、ロゴスにとっては質料は闇となる。しかし、現代日本語においては、ロゴスの側面ははじめから相対化されている。質料は抑圧されないばかりか、常に言語の基礎として働く。したがって、現代日本語は、形相も質料も自然に語ることができるのである。

のみならず、「補説語—述語」形式から「主語—述定語」形式への変換は、幾何学における図形変換と同様、変換の主体という概念を必要としない。つまり、ここでは近世哲学を特色づける認識論上の諸問題は消失すると考えられる。われわれは現実の只中に生きているのであるからあらためて現実を認識する必要はない。

ロゴスの境界を乗り越えようとしたハイデガーは、ロゴスを絶えず意図的に現実に浸しながら存在者の存在を問い求めた。だが、そのハイデガーも言語の制約にはついに勝つことはできなかつたようである。『哲学への寄与—生起について—』の中で彼はこう言っている。「有は(生起として)有るものを必要とする。それは有が本質現成するためである。有るものがそういう仕方では有る必要とすることはない。有るものは有に立ち去られてあることにおいてなおも、「有る」ことができる。」邦訳36頁。(Das Seyn (als Ereignis) brucht das Seiende, damit es, das Seyn, wese. Nicht so bedarf das Seiende des Seyns. Das Seiende kann noch » sein « in der Seinsverlassenheit, ...s.30)「われわれは有(生起)を決して直接に言い示すことはできない。」邦訳87頁。(Wir können das Seyn (Ereignis) nie unmittelbar sagen, ... s.79)つまり、ハイデガーにとって、「有 das Seyn」即「生起 Ereignis」—これらはわれわれの言葉で言えば、質料即現実に相当する—は直接には語りえないものである。それは有るもの(個体、自己同一者)を通してのみ語りうる。そうして、後者は、それ自身の次元においては「有に立ち去られてある」状態でも支障なく語れるのである。

哲学は、もはや存在という枠組みの中に安住することを許されない。形相によって質料を抑圧する人間中心主義は限界に来ている。それは誰の目にも明らかである。今日、現実そのものが人間を脅かしつつある。西洋語によって哲学は誕生し発展してきたが、その哲学は、いまや内的、歴史的必然性において自己を超克することを要請されている。自己超克の要は、ロゴスの制約を越えて現実の只中に哲学を置くことである。そのためには、主語を核とする西洋語の構造的しぼりを緩めなければならない。主語に従属する述定語から現実に密着する述語へとわれわれの意識を拡張しなければならない。それができるならば、すなわち、「言語=西洋語」という思い込みからわれわれの意識を解き放

つことができるならば、言語は、人間の道具、人間の能力という狭隘な規定を脱して、現実と思考の媒介者という本来の性格を取り戻すことができるようになるに相違ない。

参考文献

- 1) 雨宮民雄「現実への階梯」『場所』現代哲学への冒険7, 岩波書店, 301-371, 1991年。
- 2) 雨宮民雄「時間の非実在性と知の流儀」『科学哲学』37-2, 71-83, 2004年。
- 3) Aristoteles, *Aristotelis Opera I, II*, Bekker, 1831, Fotomechanischer Nachdruck, Walter de Gruyter, 1970.
- 4) Berkeley G., *A Treatise concerning the Principles of Human Knowledge*, Edited, with an Introduction, by Turbayne C. M., The Liberal Arts Press, 1957. (邦訳『人知原理論』大槻春彦, 岩波文庫, 1958年。)
- 5) 橋本進吉『新文典別記』富山房, 1931-1939年。
- 6) Heidegger M., *Beiträge zur Philosophie (Vom Ereignis)*, Gesamtausgabe Abteilung III, Band 65, Herausgegeben von Herrmann F.W.V., Vittorio Klostermann, 1989. (邦訳『哲学への寄与論稿』大橋良介, 秋富克哉, ハルトムート・ブフナー 訳, ハイデガー全集, 第65巻, 創文社, 2005年。)
- 7) Hume D., *A Treatise of Human Nature*, Edited, with an Analytical Index, by Selby-Bigge L. A., Second Edition, with text revised and notes, by Nidditch P.H., Oxford University Press, 1978. (邦訳『人性論』(一), 大槻春彦, 岩波文庫, 1948年。)
- 8) 金谷武洋『日本語に主語はいらない』講談社メチエ, 2002年。
- 9) 金谷武洋『日本語文法の謎を解く』ちくま新書, 2003年。
- 10) 金谷武洋『英語にも主語はなかつた』講談社メチエ, 2004年。
- 11) Kant I., *Kritik der reinen Vernunft*, (1781, 1787), Philosophische Bibliothek, Velix Meiner, 1971. (邦訳『純粹理性批判』高峰一愚, 世界の大思想10, 河出書房, 1965年。)
- 12) Kasher A.(editor), *The Chomskyan Turn*, Blackwell, 1991.
- 13) Lock J., *An Essay concerning Human Understanding*, Edited, with an Introduction, by Nidditch P. H., Oxford University Press, 1975. (邦訳『人間知性論』(一) 大槻春彦, 岩波文庫, 1972年。)
- 14) Mach E., *Die Analyse der Empfindungen und das Verhältnis des Physischen zum Psychischen*, 6 Auflage, Verlag von Gustav Fischer, 1911. (邦訳『感覚の分析』須藤吾之助, 廣松渉, 叢書ウニベルシタス, 法政大学出版局, 1971年。)
- 15) 三上章『現代日本語法序説』復刊, くろしお出版, 1972年。(初版1953年, 刀江書院。)
- 16) 三上章『象は鼻が長い』改訂増補版, くろしお出版, 1969年。(初版1960年。)
- 17) 三上章『日本語の論理』くろしお出版, 1963年。
- 18) 大槻文彦『廣日本文典・同別記』1897年。復刻, 勉誠社, 福島邦道解説, 1980年。
- 19) 酒井邦嘉『言語の脳科学』中公新書, 第八版, 2004年。
- 20) Wittgenstein L., *Philosophical Investigations*, German/English, Translated by Anscombe G.E.M., Second Edition, Blackwell, 1958. (邦訳『哲学的探求第一部読解』黒崎宏, 産業図書, 1994年。)

言語と哲学—日本語の哲学的効用—

雨宮民雄

(東京海洋大学海洋科学部海洋政策文化学科)

思考は言語と不可分である。そのため、思考は言語の構造に制約される。哲学の用いる言語は西洋語である。西洋語は主語を核として成立する。主語は自己同一的な個体に対応する。したがって、哲学的思考は個体の枠組みの中にある。哲学は世界を個体から構成されているものと考え、世界の根底にある素材でさえ、哲学は観念や感覚要素やセンスデータといった個体として解釈する。

個体の次元に拘束されているかぎり、哲学は生の現実に触れることができない。なぜというに、生の現実はそのような一定の形をもたないからである。現実には絶えることのない生成消滅である。一方、日本語はこのような形のない現実をそのまま捉えることができる。それは、日本語が本来主語をもたないからである。日本語は形のない現実をそのまま述べる述語によって成立している。

明治期の近代化戦略により、日本語も英文法にならって西洋的構造を付与された。そのために日本語本来の姿は見失われてしまった。だが、われわれが日々それによって暮らし、それによって考えている日本語は、実質においては依然として主語をもたない述語本位の日本語である。

現在、西洋哲学は自己同一的個体の根底にある現実を捉えようとして捉えあぐねている。もしもわれわれが西洋化された日本語とともに本来の日本語をも思考の中に取り入れることができるならば、哲学が現実を前にたじろいでいる状況を打開することに貢献できるのではなかろうか。

キーワード： 主語、自己同一的個体、形なき現実、日本語、述語